

【書評】

フェルディナンド・ガリアーニ（黒須純一郎 訳）『貨幣論』

京都大学学術出版会，2017年，xxxvii + 640頁

原著は匿名で1751年刊。22歳の青年が著したイタリア経済学史の最高級の古典が、ついに日本語に全訳された。まさに快挙である。

シュムペーターは『経済分析の歴史』で、本書を限界効用論の先駆とみなし、「1851年に出版されたとしても、敬意をもって受け容れられたであろう」（東畑精一訳）と讃えた。

マルクスは『経済学批判』で、本書（46）の「労苦は、[...]物に価値を与える唯一のものである」を引き、「労働を *fatica* [ほねおり] とよぶのは、南国人の特徴である」と揶揄しながら、「多かれ少なかれ適切な思いつきで商品の正しい分析にふれているイタリアの経済学者」（岩波文庫訳）の筆頭に挙げた。

このようにガリアーニの『貨幣論』は、価値論史上の特異点的な要所に位置しながら、「訳者解説」が慨嘆するとおり「注目されずに忘れ去られた」（559）。しかし、それは「世界的にマイナーなイタリア語の言語的制約」（606）のためではなからう。後世の学者には「致命的」な問責となっても、同時代人は融通無碍である。現にゲーテが「ベッカーリアとフィランジェーリの時代」と『ヴィルヘルム・マイスター』で呟いたように、『犯罪と刑罰』や『立法の科学』は、競って諸言語に翻訳され、全欧的な名声を博している。

むしろ本書の不遇は、書名にも帰因するのではないか？ シュムペーターも指摘するように、16世紀のダヴァンツァーティや17世紀のモンタナリーに連なるイタリア貨幣論の系譜の掉尾を飾る雄編であることは間違いない。だが、本書が最も論敵視していると覚しいムロンの『商業論』と比べても、やや古色

蒼然とした印象を与えることは否めない。

つまり、ガリアーニは、早熟な「遅れてきた青年」であった。本人もそれを自覚していたから、1780年の「第二版への注釈」で、「うまく自分を隠すためには、本書の著者が、逆境に抗って疲れ果て、あまりに世間を知りすぎてうんざりした熟年の威厳ある人であったかのようなふりをするのが好都合のように思われた」（390）とうそぶいたのだろう。

ニーチェがこの箇所を読んだかどうかは定かでないが、18世紀の「もっとも深い、もっとも炯眼な人物、しかもおそらくはもっとも汚らしい人物」（『善悪の彼岸』26節）というガリアーニ評の背景には、こうしたシニシズムの権化という西洋世界に広く流布したイメージが潜んでいることも見逃せない。

例えば、『シニカル理性批判』の著者スローターダイクも、小説『魔の木』で、コンドルセに対して、ガリアーニにこう発言させている。「キリスト教の信仰はすでにもうろくしています。私たち聖職者が、それに気づかぬはずはありませんよ。ただね、自分の用件が済んでしまった人間には、何事もよく見えてくるのです」（高田珠樹・高田理恵子訳）と。

ガリアーニ自身の信仰はどうだったのか？ これは『貨幣論』の白眉ともされる、「価値のパラドックス」の解法にも関わってくる。

「もし誰かが、最低の効用しかない物がひどく度を越して高いのに、まさに最も効用のある物全部がいかにかいかに驚くとすれば、彼は、この世界が、不思議な摂理によって、我々のために、一般的に言って、効用が希少性と決して出合わないほどうまくつくられて

いることに気づかぬばなるまい」(42)。

同様の論法は、「人間労働のさまざまな価格、それは何に由来するのか」という問いに対して再演される。「人々は、摂理によってさまざまな職業に配剤されているが、希少性の不平等の割合で、人間の必要のための感嘆すべき英知に釣り合って生まれた」(49)。階層区分を金属の序列に喩えたプラトン『国家』(414B-417A)も想起させるが…。

これではまるで「価値神授説」ではないかというのが、学部頃の評者が、初めて『貨幣論』に接した際の素朴な感想であった。祈祷のように繰り返される「不思議な摂理 *meravigliosa provvidenza*」や「神の慈愛に満ちた手 *mano benefica di Dio*」等々の定型句に唾然とした記憶があるが、案外その正体は「機械仕掛けの神」だったのかもしれない。

さて、後年「小マキアヴェッリ」と仇名された人物らしく、本書にも、「個別の事どもについては、たった一人の賢人よりも多数の無学者の方が多くのことを知っている」(61)とか、「貨幣は一国の真の富ではない。真の富は人間である」(162)などの警句がある。

では、なぜ青年ガリアーニは、賢人たちを対象に、貨幣を主題とする書を著したのか？

評者はまだ、二様の読解の間で迷っている。

一方は、『貨幣論』は『君主論』の衣鉢を継ぐべく書かれたという率直な読み方である。

どちらも、「イタリアの民の心に、古の勇武は、今も滅びざれば」(池田廉訳)というペトラルカ『カンツォニエーレ』の詩句で結ばれている。また、『君主論』が、〈君主政体の分類学〉と〈「新しい君主」への指針〉の二部構成であるように、本書前半では貨幣理論、後半では貨幣政策が、歴史に徴して論議される。

すなわち、第一編「金属について」と第二

編「貨幣の本質について」で展開される価値論は、貨幣は金属としての「内在価値」を要するという金属主義に基づくものだが、現実には、「金属は、貨幣としてよりも金属としての用途の方が価格が高い」(60)。そこで、第三編「貨幣価値について」では、「君主と国家が、諸商品と貨幣の価格に関して大衆の観念連鎖の緩慢な変更から引き出す利益」(234)として、貨幣の(名目)価値の「引き上げ *alzamento*」の得失が検討される。実質的には、国家債務償還のための緩やかなインフレ政策の提言となる。さらに、第四編「貨幣流通について」では、貨幣の流通必要数量や奢侈容認論、第五編「貨幣の利子について」では、時間選好説的な是認論も提示される。

となれば、『貨幣論』こそ、イタリア版のマキアヴェリアン・モメント、国家理性から経済的理性への変貌の決定的瞬間といえよう。

他方、これとは真逆に、同時代の経済学に冷笑を浴びせる腕だめしの作とも読める。

実は、『貨幣論』はペトラルカでは終わらない。もう一言、「しかし、結局、平和になっても、こう言い始めねばならない。『イタリアは廃れ、野蛮になりゆく』と」(387)と捻るのだから、一筋縄ではいかない。本誌43号(2003年)の拙稿でも紹介したが、ジェノヴェージの一番弟子ガランティも、晩年のガリアーニを、「機知も才能も知識もあったが、悪意に満ち…ナポリで経済問題を理解できるのは自分だけだと思っていた」と評した。

「経済的理性」も「犬儒主義」も、最晩年のフォーコーの未完の研究テーマである。本書は、これらを再検討する際の絶好かつ不可欠の素材となろう。もちろん、学説史・理論史研究者の必見書であるのは言うまでもない。

(奥田 敬：甲南大学)